

あびこの文化

発行人 大洋 美崎
我孫子市 高野山
250-23
04(7182)
0861

三谷さん、ありがとうございます。

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課
辻 史郎

三谷さんのことで最も印象深いのが「嘉納治五郎先生之像建立プロジェクト」のことです。平成30(2018)年の春頃、三谷さんと美崎さんが文化・スポーツ課においてになり、嘉納治五郎師範が「我孫子にとって大切な人」であり、嘉納治五郎別荘跡(天神山緑地に朝倉文夫の「嘉納治五郎先生之像」を建立したい、と熱く語られました。お二人に肩を押され、朝倉文夫の作品を所蔵する台東区立朝倉彫塑館と、所管する台東区芸術文化財団と調整することとなりました。

その結果、朝倉氏が作った原型から鋳型を起し、講道館、筑波大学付属小学校占春園(いずれも東京都文京区)、筑波大学(つくば市)などと同じ「兄弟」の像になるとのことでした。三谷さん、美崎さんと作戦会議を開き、まずは嘉納治五郎師範について広く知っていただくための講演会や展示会を開催してPRすること、基金を作つて広く資金を募ることなどを話し合いました。

お話の中で、今回のプロジェクトはただ銅像を作るということが目的ではなく、嘉納師範と我孫子の関わりを多くの方々に知っていただくことに意味があるのだと思います。その後、筑波大学や講道館、柔道界のお歴々をお招きしての講演会を実施し、我孫子の文化を守る会の方々の物心両面の支援を得て、令和2(2020)年4月15日、「嘉納治五郎先生之像」のお披露目につながりました。コロナウイルス感染拡大防止のため盛大な式というわけにはいきませんが、晴れ渡つた空の下、嬉しそうに師範の像を何度も見上げる三谷さんの姿が今も思い浮かびます。私は、三谷さ

んの思いを受けて、これからも我孫子の文化と歴史のために粉骨砕身する所存です。三谷さん、どうもありがとうございました。

(写真は令和元年12月18日、鑄造途中の嘉納治五郎先生之像。左は美崎さん、中央筆者、右は三谷さん)



三谷先生を偲んで

越岡 禮子

七月四日、「我孫子の文化を守る会」名誉会長の三谷和夫先生が亡くなられました。私にとって、公私共に大変親しくしていただき、また、多くの御指導をいただいていたので、ただただ悲しく残念でなりません。

昭和五十五年、「我孫子の文化を守る会」設立の元になった「志賀直哉邸保存運動」に参加した義父に代わり、五十八年に私が入会して以来、三谷先生にいろいろお世話になりました。

その後も「我孫子市史研究センター」「クリオの会」「流山博物館友の会」等で一緒に私の人生の半分以上を三谷先生に様々にお世話になりました。何か

と至らない私ですので時には電話でお叱りを受けることもあり、奥様から「越岡さんは家内ではないからそのようにづけけ言つてはだめなのよと、叱られちゃったよ」と笑いながら私にあやまってくださることも有りましたが、私自身は有難いことと感謝しています。

私が当会に入会して三年ほどして役員改選があり初代から会長の兵藤純二氏、副会長に三谷和夫氏と逆井萬吉氏、そして私。幹事の人達も多方面で活躍されている人達でした。

当時は皆、若く、次々と有意義な企画が催され、我孫子に関心をもつ人達が入会し、たちまち百数十名の会員数となりました。三谷先生はすでに都立高校の校長をなされていたかと思いますが、堅苦しさはなく、いつもの笑顔と爽やかな説得力で会員を増やし、新しい企画を次々と発案して会が市内の老舗文化団体と認められるようになったのも初代会長の兵藤氏との二人三脚あつてのことと思います。

民話の採集や史跡散歩など好評な企画の中で手賀浄化の願いを込めて発刊された『句集 手賀沼』や、『手賀沼百人一首』も話題となりました。

『句集 手賀沼』の選者、金子兜太氏と三谷先生はその後、千葉県の刊行誌に「手賀沼への想い」を込めた対談をしています。



対談する三谷さん(左)と金子兜太氏

当会の短歌会の御指導も「新あららぎ」の歌人である三谷先生の存在があつてこそと思います。

三谷先生の功績は幾つもありますが、なんとと言っても地域の人達に手賀沼の豊かな自然や我孫子市

が歴史ある魅力ある街だと広く人々に伝えたこと
でしょう。

当会の講演や史跡散歩だけでなく、「市史研究センター」「長寿大」「市民カレッジ」「ふれあい塾あびこ」等で講師を務め、「流山博物館友の会」では約二〇年間も東葛地区の歴史を会誌に紹介しています。

長く「流山博物館友の会」の会長をつとめられた山本鉦太郎氏は「文化を守る会」と「友の会」は兄弟会だよね。」と口にしていたのも三谷先生のお人柄あつての事と思います。

我孫子駅前建つ「飯泉喜雄顕彰碑」建立の発案をなさつたのも、また天神山に建つ嘉納治五郎先生の像建立も三谷先生の言葉どおりですと「言いだしつぱ」でした。

他にも実現に至らず残念でしたが「我孫子宿旧名主邸」の保存運動にも熱心でした。由緒ある建物を将来は歴史資料館にと奔走されて法定人数の署名を集め、議会も購入を決めたのですが直前に破談となつてしまつたのです。

文化都市をめざす我孫子市ですから博物館をぜひ設立して欲しいと思います。

晩年も三谷先生は「白樺の日」を設けたらどうかかな」などと私に言っていました。それは柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤の三人が我孫子に住むようになった日でしょうか。あるいは武者小路が日向の新しき村に出発した日でしょうか。

我孫子文士村の沢山のエピソードを発信して街起しになるよう考



えていたのでしよう。我孫子を愛し、誰よりも「我孫子の文化を守る会」の発展を願っていた三谷先生です。御冥福をお祈りします。合掌

一 三谷先生を偲ぶ

村上 智雅子

一、短歌への情熱

井原西鶴は一日に千句以上の俳句を作り、矢数俳諧というジャンルを創り出したことは知られていますが、三谷先生も負けず劣らず時折一日に二十首、三十首も作られ、旺盛な短歌活動を続けられました。まだ、文化を守る会に短歌会がない頃から何処かに出かけては、十数首の詠まれた歌を手書きでコピーされ、皆さんに配って下さつたものです。

そのうち当会の新プロジェクト立ち上げの折、「気楽に短歌に親しみませんか」ということで、同好会のような形で「短歌の会」が発足しました。指南役は三谷先生、印刷その他会場予約は美崎会長。あらかじめ会員募集で九名申し込まれたものの、第一回目の平成二十八年九月二十日の参加者は四名というささやかなスタートでした。二回目は八名、そのうち他の短歌会で修行を積まれた女性三人の方も三谷先生のお誘いで加わり、作歌の精度も高められ、第四十八回となつている現在も八、十名の方々が参加で、継続しています。

何よりも形にこだわらず参加奨励の集まりで、歌の優劣よりも詠むことを愉しみ、お互いの生活と心のあり様を言葉にして分かち合うことを大切にしてくれました。コロナ禍で、どこも公的施設が閉鎖された時も、三谷先生のお計らいで東高野山自治会館という交通不便な所ながら、お借り出来たことに感謝して足を運び、続けられました。

三谷先生は、時々黒板を使われて斎藤茂吉の「写生」についてとか、作歌上の言葉使いについて話されたり、歌の批評をされながらも、まずは観察力の重要さ、どんな対象を詠んでもどこかに品性を保つことを大切にされ、単純明快な歌がお好みのよう

した。

この度の三谷先生の訃報に接して、残念でたまりません。まだまだお聞きしたいこともありましたが、これからも、短歌の会は美崎会長を中心に三谷先生に倣って、まずは「継続は力なり」と「お互いの個性を深める」をモットーに、若い方々の参加を願いながら精進してまいります。

二、いただいた言葉

今から三十年程前、当会の二十周年記念誌に、志賀直哉について「二十枚位書けるでしょう」と勧められたことがありました。まだ仕事をしていた時で、随想のようなものをまとめました。その感想は「深いものがあるが、研究論文になつていませんね」といわれ、納得しました。三十周年記念誌には、桜についての随想文を纏めました。すると、「よく観察し考えてますね」とのことでした。

先生の傘寿の折、越岡さんのお祝いをお届けしたと伺い、私も日頃の御礼をと思い叶匠寿庵の和菓子を送つたことがありました。しばらくしてから、「手賀沼の桜など、誰もしてないことを、コツコツ調べて感心」と云つて「角館の桜皮細工」の盆額を頂戴しました。桜の皮をリーフ柄にデザインした滋味深い盆額は、今も本棚の上で静かに見守つてくれています。

三、アスリート研究者・歌人

最後にもっとも三谷先生らしいエピソードをひとつ。十五年程前、手賀沼の対岸に育つた大正の法然といわれた弁栄上人のことを調べに柏の図書館に行ったことがありました。坐つてしばらくして五メートル程先のテーブルで三谷先生が調べものをしてるのに気づき、驚きました。一時間程経ちますと、「私はもう終わったので先に失礼。自転車でも来たもので」と云われて颯爽と退出されました。なんとという健脚と研究心でしょう。頭が下がる思いでした。先生が努力家で研究熱心であり、図書館で部厚い本を開いて調べものをしていたことは知られ

ていますが、生活全体がどこかアスリートの感じがありました。沼南でも取手でも自転車で出掛け、筑波山に何度も登り、朝晩の自己流体操もかかせませんでした。いつでしたか嘉納治五郎の話を放談くらぶでなされた折、薄いマットを持参され自己流体操



(左から)越岡さん、紅野敏郎先生、三谷さん、村上(白樺文学館にて)

なるものをご披露されました。
アスリート研究者にして歌人であった三谷先生。今でも自転車漕いで、雲の上の図書館に通ってられるでしょうか。

追悼 三谷和夫さん

牧田 宏恭(会員)

私と「我孫子の文化を守る会」との接点は、「広報あびこ」で紹介された「地名は文化、地名の由来を知り街おこしを考える」とサブタイトルが付けられた「我孫子地名考」という、講演会の聴講申し込み案内記

事であった。

これは「我孫子の文化を守る会・歴史文化くらぶ」の催しで、2012(平成23)年11月5日開催が第一回の地元「我孫子」の歴史を紐解く講座だ。講師は「三谷和夫さん」が務められ、2013(平成25)年5月4日まで、奇数月・第1土曜日開催を原則として7回にわたり開かれ、私は、講座のテーマへの興味と、「三谷さん」の講話が解りやすく、出席を重ねるほどに引き込まれていったことを想い出す。結局この講座全てに出席することになった。

私は、この講座の聴講開始から、程なく翌2012年当会に入会させていただいた。

「我孫子地名考」は、「我孫子」という地名の由来、由来に存在する諸説の紹介からスタート、市内各所にある「難読地名」を「その地の説明、地名の由来・纏わる諸々の裏話など」と関連文献の紹介、古文書、市史資料など豊富に紹介し、それらに解説を加えての熱弁が印象的であり、のめり込んでいかざるを得ない内容ばかりであった。

講座の第1回目に、同年3月11日発生「東日本大震災」の被害が顕著した「布佐・都地域」の「液状化現象」について、同地域は古くは「切れ所沼」であり、後に整地されて「都」と名付け分譲された処で、軟弱地盤が災いした例との話に、強烈な印象が残った事は忘れられない。

「我孫子」の地名そのものには、この地の「歴史」を知る上で「貴重な力ギ」となる。全7回に及ぶ「講座」では、我孫子市内の「地名」のみに止まらず、柏市史を含む「東葛の歴史」「手賀沼とその移り変わり」「手賀沼と生業」「手賀沼と文化人」引いては「平将門伝説」「新四国相馬霊場88か所」にまで多岐に及ぶ内容であった。

私は、今は亡き「三谷和夫さん」から「諸知識・見分(見聞)」を学び、それが今「更にこの地への愛着を深める」行動に繋がっているとの想いを深める。

「三谷さん、ありがとうございます。どうぞ安らかに眠りください(合掌)」

三谷和夫さんの逝去に思うこと

佐々木侑

当会の第二代会長を務められ当会の発展に多大な功績を残した三谷和夫氏が七月四日、九十五歳でお亡くなりになりました。誠に残念なことで慎んで哀悼の意を表します。

当会の会長をお辞めになられた後も名誉会長として当会の指導を控えめに続け、我孫子に関する文化や歴史について旺盛に探究をなされておりました。当会の研究発表講演会である「放談くらぶ」では小職が担当した二〇一三年から十回も講演をして頂きました。その内容は「相馬霊場八十八箇所」「白樺派と美術館「昭和前期の学校」我孫子通行記」大黒屋光太夫「嘉納治五郎に学ぶ」「沼辺の史跡今昔」等々でした。講演候補者が見つからないときでも三谷さんをお願いすると二つ返事で引受けて下さいました。豊富な知恵の抽斗が幾つもある魔術師でありました。その講演内容は判りやすく、いつも会場は聴講者で溢れるほどでした。三谷さんのご指導に深く感謝いたします。

さらに、三谷さんは短歌アララギ派に所属する歌人でもありました。私は当会でのプロジェクトである「百人一首の会」に所属し少々和歌に興味を持ち、また義母が永年短歌の会に加入しており亡くなった後、作品を整理したことなどから短歌に関心を持つようになりました。

「当会で三谷さんが短歌会を指導している。参加しないか」とのお誘いに迷いませんでした。短歌会は二月に一度、自作の作品を持ち寄り、参加者が相互に批評感想をのべ最終三谷さんが評価する厳しく楽しい会合です。しかしそれは上級者のできることで、初心者は他者の短歌の意味、内容、情景など判らないのが当たり前です。自分では短歌の形(三十一文字)になると、自分なりに意味は判り他人が批評などせず褒めてくれると、勝手に思うのです。初回からボロボロに批評され、とんでもない短歌会に入ってしまったと思われました。それでも三谷さんは私の作品を粘土で像

を捏ねるように修正してくれました。その短歌は、山登りしてようよう辿り着いた山小屋で、囲炉裏で串焼きした岩魚を熱々の日本酒で浸す骨酒の美味さに感心、囲炉裏の向かいにいた女性が艶かしく思えたことを歌ったものです。作品は三谷さんの手の内で添削修正され、以下のごとく。

「チンチンの熱爛にせる岩魚酒の

湯気たつ先に君の微笑み」

注「岩魚酒は「二つざけ」と読む

三谷さんが体調を悪くされてから、美崎さんも短歌の心得が深くあり、中心になり現在も休会することなく続けています。厳しく、時に優しく指導し、添削してくれた三谷さんがお亡くなりになり残念でなりません。残された短歌会の私たちが、短歌の研究を続け精進して美しい短歌を作り続けたいと存じます。

向こうからスポーツマンでもあった三谷さんが走って来て、「佐々木君、金色の実がなるこの樹の名前は何かね」と話しかけ、私が「せんだんの樹です」とお答えすると「そうだね」と言いながらまた走り出して見えなくなりました。そんな夢を見た時の一首。

「走り去る人に問はれり金色の

実なる樹せんだんむらさきの花」

三谷さんは元来、理工系の人で工業高校の校長先生を歴任したと聞いております。そんな技術系の方が歴史上の人物の功績や、地域に根ざした伝承伝説の解明、様々な土地の地名の由来を解説し、また我孫子市に関連する文化人や白樺派の活動を世間に知らしめ、嘉納治五郎の銅像を残しました。このように「我孫子の文化を守る会」を発展させ多大な功績を残したお方であります。しかも歌人でもありました。私から三谷さんに贈りたい言葉は「みんなの為に燃え尽きた三谷さん、どうか安らかにお休み下さい」

「短歌を嗜む」三谷和夫さんを偲ぶ

会員 芦崎 敬己

私が三谷さんを知ったのは、我孫子の文化を守る会

に入会する前のことでした。

資料を引つ繰り返して調べると、当時二〇〇二年（平成十四年）に立ち上げたNPO法人の企画会議に關して、それらしい資料が見つかった。

このNPO法人は、市内の学童保育の父母（保護者）会の元役員など数名で立ち上げた社会貢献団体で、「子どもの健全育成を図る」ことを活動分野にした特定非営利活動法人でした。

学校週五日制（土日休）が定着してきた状況で、子どもにも有意義な週末を過ごす事業として「土曜日プログラム」事業を設定した。その一項目で『郷土史家を招いて我孫子を知る』というプログラムを企画し、我孫子市役所の職員の紹介で三谷和夫さんを知り、後日、講師依頼にご自宅を訪問した。

冬の晴れたある日曜日に「ご自宅を訪ねると、座敷に案内され、炬燵に入る様に気安く促してくれた。

「我孫子を知るプログラムの話をする」と講師依頼を快く承諾してくれた。初対面の依頼に快諾して貰えて、それまでであった緊張が一気にほぐれた。

その後は、三谷さんから私に「あなたは、短歌はやっているの」と質問が出た。私は、「いいえ、していません」と答えると、更に年齢を聞かれて、「もう、短歌を嗜んでも良い年だね。短歌をやらなかい」と二の矢が飛んできた。帰り道、三谷さんの『短歌を嗜む』の言葉が耳に残り、良い言葉だと心に響きました。

その後、私は、二〇一五年（平成二十七年）に我孫子の文化を守る会に入会し、以来、三谷さんと何度もお会いして、話をしました。その中で、三谷さんが現職の頃に、東京都立港工業高校（港区西新橋）で化学の教員をしていたことを聞き、私の知り合いがその高校で三谷さんの授業を受けていたことが分かりました。後日三谷さんにお伝えしました。しかし、たくさんの教え子の中で一生徒の記憶は無かったようでしたが、奇遇な繋がりを感じました。

その後、二〇二〇年（令和二年）七月の会から、私自身が我孫子の文化を守る会の短歌会に漸く参加することになりました。



三谷さんのお元気なうちに短歌や歴史等に関する教えや知識を少しでも吸収する様にしたく、毎回ご指導を仰ぎました。記憶にある三谷さんの短歌の指導で、私が筑波山を詠った短歌で、筑波山は「双耳峰（そうじょうほう）」と詠んだら良いと教えて貰いました。素人の私には、大きな知識となりました。

「短歌を嗜む」、三谷さんの何気ない言葉は、その後の私の人生を豊かにしてくれた。有難い言葉と嗜み締めています。

三谷さんありがとうございました。ゆつくり短歌を詠んで下さい。

三谷さん 安らかにお休みください

美崎 大洋

昭和60年に我孫子に移って暫く後、我孫子在住の大学の卒業生で行われていた同窓会に出席した際、先輩の女性から歴史の会「クリオの会」に誘われた。その「クリオの会」で三谷さんと初めてお会いした。

「クリオの会」は『我孫子市史』の編纂を指導していた斎藤博独協大学教授を会長として定期的に会合を持ち、斎藤先生のお話を聞く会で、もともと歴史は嫌いでなかった私の好奇心をくすぐるものだった。

ある時、三谷さんが「我孫子の文化を守る会」への入会を勧めてくれた。その時、三谷さんは当会の会長だった。その後、三谷さんから当会の会報作成担当のご指示があった。私より一回り以上のお歳でいつも颯爽と自転車で市内を走り回っていた。その姿は今でも目に焼き付いている。また沢山のことを教わりました。

本来、三谷さんの追悼文は「我孫子の文化を守る会」の三谷さんを知るすべての会員から投稿して貰うべきと思いますが、期間的にも技術的にも難しいこともあり、役員から追悼文を受領し、掲載しました。改めて会員を代表してご冥福をお祈りします。

「美しい手賀沼を愛する市民の連合会
略称(美手連)」の活動に参加して(第11報)

牧田 宏恭(公員)
ひろゆき

会報「あびこの文化」に連載の本報告は、前第200号(令和6年7月1日発行)に続き、第11報になる。前号では…

- ①「令和6年度美手連総会報告」
- ②「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材事業」報告
- ③「手賀沼の水の水質調査」(手賀沼の水の残留農薬分析)結果の扱いについて報告
- ④「令和6年度手賀沼水環境保全協議会(略称:手水協)通常総会報告」
- ⑤「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について」の問題改善報告

今号は、それらの進捗状況を含め、(本年7月、8月)の主な活動内容につき紹介させていただく。

1. 美手連各員・各団体個別の主な活動内容(本件は本年4月以降7月まで)

- 7月8日開催の理事・運営委員会にて報告された内容12団体を紹介する。
- ①我孫子市消費者の会——消費生活展開催、マイクロナスチック講座開催他
- ②我孫子の景観を育てる会——「我孫子のいろいろな景歩き」実施、「おでかけ倶楽部」実施他
- ③我孫子の文化を守る会——「放談くらぶ」開催「デジタル教材:2作品」上映披露他
- ④我孫子野鳥を守る会——「定例手賀沼探鳥会」開催、「Enjoy 手賀沼」ボードウィーク探鳥会他
- ⑤NPO法人アルバトロスコットクラブークリーン手賀沼協議会「手賀沼清掃活動」参加
- ⑥NPO法人亀成川を愛する会——「印西市と協働事業:別所谷津公園の生態系を守る活動」他
- ⑦NPO法人せつげんの街——消費生活展参加他

- ⑧大津川の水辺をきれいにする会——4地区での清掃活動実施、「花壇整備」実施他
- ⑨岡発戸・都部の谷津を愛する会——市内小学校生徒対象観察会、「水質」「外来植物調査」他
- ⑩手賀沼漁業協同組合——魚の放射能検査(昨年より4回)、基準値100ベクレルを大幅クリア
- ⑪手賀沼水生生物研究会——「河川我孫子事業場」(四)池「保全活動」「親子自然観察会」実施他
- ⑫流山市立博物館友の会——「東葛樹木事典」発行「講演会:江戸の村と百姓」「筑波探訪」等

2. 都部谷津における特定外来生物(植物)観察会

毎月第4月曜日に実施されており、「ナガエツルノゲイトウ」に加え、

とうとう「オオバナミズキンバイ」が、都部谷津の水田にて発見され、その動向に観察の眼が注がれている。いよいよ水田地帯に侵入となれば稲の収穫に与える影響が多いに懸念される。

(写真1)は「オオバナミズキンバイ」(他地区写真参考)。



写真1

3. 手賀沼水環境保全協議会(略称:手水協)関連

- ①手賀沼流域フォーラム実行委員会(美手連が事務局)

《地域企画》——流域地域全体で25企画が立案され、内我孫子が11企画(当会実施の:木下舟巡りも含む)、柏が5企画など。
《全体企画》

- イ、「ワークショップ:モグリウム(沈水植物を栽培する水槽)で水草を育てて、生き物たちのにぎわいを創り出そう」:2025年度開催に向けて勉強会実施——6/27実施済
- ロ、「登録ボランティア調査・駆除作業」:手賀沼公

5. 手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について「問題改善」

継続して報告させていただいている。この問題の進捗は、前号にて「千葉県柏土木事務所との打ち合せの結果」先ず「廃棄船」「放置船」の対策から、県として実施する」との回答を得ていることを紹介した。

ただ、現場(高野山地域の沼辺・植生帯)には本年7月20日過ぎ迄は、「ナガエツルノゲイトウ」や「オオバナミズキンバイ」の繁茂が群落状態を呈し(写真2)、「放置船・廃棄船」も埋もれてしまつて

園駐車場地先にて6/29実施済
手賀沼流域フォーラム実行委員、我孫子市手賀沼課職員、白井市環境課職員、美手連、一般:某県議グループ員他
全体で約30名が参加
ハ、講演会:「侵略的外来水生植物2023年の繁茂状況」——11/16アビスタ(予定)他
《調査事業》——「手賀沼船上調査」:昨年度に続き7/8実施済
「ヒメガマ」「マコモ」「ヨシ」の抽水植物の繁茂状況調査その他を実施。昨年秋季実施時に比較し、生育地域の拡がりが見られるが、同時期の比較ではないので考察は控えたいとの報告あった。

4. 「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材事業」について

すでに完成済の13作品に、今年度制作4作品が追加完成される。学校の現場で如何に使われるか現場の意見を取り入れ、ブラッシュアップさせるか。また、作品には著作権問題は切り離せない。取扱には注意を払う必要が指摘されている。

- ②手賀沼協働調査
- ③手賀沼における水生生物調査——手賀沼水環境保全協議会(手水協)ホームページ参照

下記の5地区:12土アルファ地点で6、7月実施済
柏市(大堀川、大津川)、我孫子市(湖北集水路)、白井市(金山落、印西市(亀成川))

いる状況であった
(写真3)。

ところが、7月26日に突然、改善作業の進行を妨げる「ナガエ」が「オオバナ」の駆除が開始されたと判断される、大変喜ばしい現場を目の当たりにした。

何の作業予告・揭示もなく、立派な作業用重機(ヤンマーコーポレーション製専用刈り取り機)の白いボディが1台(操縦者1名)が現れ、附随の作業船(ボート)数隻と多数の作業員と共に、「ナガエツルノゲイトウ」や「オオバナミズキンバイ」の繁茂・群落現場で、大胆な「駆除作業」が始まった。写真(写真4、5、6)はその模様。

作業は、夜明け頃から開始されたようで、日の出からあまり経たない午前5時半ごろには、遊歩道沿いのかなりの区域(70〜80m強が駆除済)であり、久しぶりに「水面」が現れた(写真7)。

駆除された「ナガエ」「オオバナ」は待機した「ボート」に大盛に積み込まれて、次々運び出

写真2



写真5



写真6



写真7



写真10



写真8



写真11



されていた(写真8)。

この「ナガエ」「オオバナ」は何処に運ばれ、どう処理されるのだろうか気になるが

「駆除作業者は、何と「胴長を装着」、直接沼内に浸かり、手作業で取り除く姿が見られる徹底ぶり。駆除は急ピッチで進行。期待は膨らむ。

中数日置いて「危険な酷暑」の最中8月2日再開。「遊歩道」と「植生帯」に挟まれたベルト状区域の「植生帯:A(藤棚突き当り近く)から、東へ瀧下広場」方向に向かいつつあり、続く土・日を挟み、作業着手5日目の8月5日には

「植生帯:E」の手前付近まで進んでいる(写真9、10)。

駆除作業現場の位置は、遊歩道脇に設置されている案内板からわかる(写真11)。この時点で、この地域全体の6割強近く駆除されたようだ。しかしながら、作業は8月6日から「盆休

写真9



「盆休み」もとうに終わった8月21日、久しぶりに眼にした現場は、作業は再開されておらず、駆除後の結果現れた「水路」区域が静かに水をたたえていた。

8月27日早朝になつても「機械の稼働音」「作業者の気配」は全くない。このままだと、更なる問題は「植生帯」内迄繁茂した「ナガエ」「オオバナ」には、

「みに突入した模様で、ヒタリと休止?」。重機も作業員も全く姿を消してしまった。「植生帯:E、F」付近の「水路」の「ナガエ」「オオバナ」は残されたままである。

全く駆除に手が付けられ無いままになっていることだ。

現在の「植生帯」には本来生育が認められていた水草は育っていないと見受けられる。将来、本来の姿になるのであろうか？

また、駆除されず残された「植生帯」F付近の水路に繁茂している「ナガエ」「オオバナ」の茂みには、沈みかけたままの「モーターボート」が相変わらず放置されている。(前掲写真3参照)。

活発に開始されたかにみえた「駆除作業」は、このまま「終了」なのか？それとも「近々再開」されるのか？中途半端な現状だ。その理由(背景)はわからない。期待は裏切られるのか？

肝心の「放置船」「廃棄船など」を取り除く作業は何時になるのか？早々に明確になることを待つのみである。

この会報「あびこの文化201号」が発行され、皆様に届いた頃に、新しい動きが見える状況になっていることを期待したい。なお、余談だが「ナガエ」「オオバナ」の繁茂は、「高野山地域」と同様に我孫子市・若松地域の「遊歩道」付近の「植生帯」にも見られ、同様の問題を抱えている様だ。極めて深刻な状況であり、「関係する行政機関の対策実施が急務だ」と思う。

プロシエト報告

百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌恋の歌その(29)

見せばやな 雄島(を)じま(の)蟹(あま)の 袖だにも

濡れにぞ濡れし 色は変はらず (90)

【現代語訳】

あなたに見せたいものです。松島にある雄島の漁師の袖でさえ、波をかぶって濡れに濡れても色は変わらないというのに。(私は涙を流しすぎて血の涙が出て、涙を拭く袖の色が変わってしまいました)

【語句】

【見せばやな】

詞。「見せたいものだ」という意味になる。

【雄島(を)じま(の)蟹(あま)の】雄島(を)じま)は、歌枕としても有名な陸奥国(現在の宮城県)の松島にある島のひとつ。「蟹(あま)」は漁師のこと、海女と違い男女どちらでもこう言う。【袖だにも】だには「くでさえ」という意味の副助詞。「袖でさえ」という意味。

【濡れにぞ濡れし】格助詞「に」は同じ動詞を繰り返して、意味を強める時に使われる。「ぞ」は係結びになる係助詞で、過去の助動詞「き」の連体形「し」が結びになる。【色は変はらず】袖の色が変わるのは、泣きすぎて涙が枯れ、ついには血の涙が流れるため。中国の故事による。

【作者】

殷富門院大輔(いんぶもんいんのたいふ。1131頃〜1200頃)従五位下・藤原信成(のぶなり)の娘で、後白河天皇の第一皇女、亮子(りょうし)内親王(式子内親王)の姉で、後の殷富門院に仕えた。当時は、小侍従(こじじゆう)と並ぶ女房の歌人として有名。非常にたくさんの歌を詠み、「千首大輔」と言われている。建久3(1192)年に殷富門院に従って出家し、尼となった。

【鑑賞】

この歌は百人一首にも登場する源重之(みなもとのしげゆき)が作った「松島や 雄島の磯にあさりせしあまの袖こそかくは濡れしか」という歌を本歌(ほんか)にした「本歌取り」の歌。本歌取りというのは、昔の有名な歌の一部を引用したりさまざまにアレンジして新しい歌を作る、和歌の技法のひとつ。

重之の歌は「つらい恋で涙を流し」松島の雄島の漁師の袖くらいだろう、私の袖のように濡れているの」と詠っている。大輔は、重之に答えて(返歌)「私の袖こそ見せたいものです。涙も枯れて血の涙が流れ、色が変わってしまったのですから。松島の雄島の漁師の袖でもこうはならないでしょう」と詠った。辛い恋で泣き続ける女性の激情を詠った一首だが、あたかも重之と時代を超えて歌で恋の問答をしているようである。本歌取

りは、百人一首の撰者、藤原定家の時代に流行ったものだが、なかなか粋なテクニクだと感じられる。

この歌は「袖の色が変わる」と語って、涙が枯れて血の涙が出るほど激しく泣いたことを暗示している。因みに「血涙」というのは、中国の古典から来た言葉。韓非子によると「ある農夫が畑で玉ぎよく、寶石の一種の巨大な原石を見つけた。王に2度献上したが磨いても石のままだったので、両足を切られてしまった。そこで農夫は激しく泣いて血の涙を流した。結局3度目に玉が磨き出され、農夫はやつと称えられた」



関連狂歌など

あと先の紀伊も讃岐も袖ぬれて

殷富門院矢張同断

夕立のはれてしぼりのその浴衣
ぬれにぞぬれし色はかはらず

(参考文献)

淡光ムック 百人一首入門 有吉保・神作光一 監修
(淡光社)
インターネット百人一首各種投稿文

放談くらぶ『兼子』を終えて(報告)

池末 成明

◇はじめに

2024年8月17日14時から我孫子の文化を守る会の「放談くらぶ」で国立音楽大学名誉教授、小林緑さんの放談を実現していただきましたことと関係者の皆さまのご支援に感謝申し上げます。

この放談の席で、私が小林さんにお目にかかるのは2度目であることに会員のみなさんが驚かれたということ、私の行動の謎?と今回の「放談くらぶ」に至るまでの背景と経緯を共有させていただきます。

◇職歴が私の行動の謎?の解明になるかと思います。

私は40年以上、国内国外での新規事業開発やセミナー、研修、広報活動を担当する機会が多く、会ったこともない皆様にも直接連絡をとって、ずうずうしいお願いや、講演、記事の執筆をお願いしてまいりました。

◇ボランティアの音楽活動支援でも、初対面の多くの皆さんの支援を得て、コンサートなどを形にしていまいりました。ですから今回、小林さんにご連絡を取ることは私には自然なことでした。

◇一方、兼子への関心から私は多くの皆さんからお話を聞きたいと願っておりまして。こうした動機があるなかで、◇音楽家との交流から小林さんとの接点があつて、今年の3月、小林さんと交流のあるハーブ奏者、池山由香さんが参加した演奏会で、一度お話ししたいと願っていた小林さんと直接お目にかかる機会があり、小林さんのご著作『ポリリーヌに魅せられて』を購読しました。この本の中で小林さんは柳兼子に触れていたのです。

◇小林さんの講演の実現の経緯ですが、『ポリリーヌに魅せられて』の出版社経由で小林さんに、我孫子市で「ご講演いただけないか」とお手紙にて打診したところご

快諾いただいたことに始まります。我孫子市民プラザの高橋さんに相談したところ、市民活動の先輩の皆さんに相談するようご助言をいただき、活動に熱心なグループをいくつか紹介いただいたところ、我孫子の文化を守る会と美崎さんがご支援をいただけることとなり、今回の「放談くらぶ」での小林さんの放談が実現しました。

◇池山由香さんの演奏を、当初は放談とセットで考えておりましたが、予算的には難しいと判断して別の機会に由香さんの演奏会を開催しようと決めました。幸いなことに全くの偶然ですが、由香さんは10月20日に我孫子アロハファーム(04-7139-7311)で演奏会を開催します。

こうした幸運は、こうした企画を進めるとよく起きますよね。皆様のご来場をお待ちしております。

◇職歴

私は、新規事業開発や広報活動、社内研修で、会ったこともない皆様にも直接連絡をとって講演や、記事の執筆をお願いする業務に従事しておりました。いずれも多くの皆さんの支援と皆様と初対面の皆さんとの信頼関係のおかげです。今回の小林さんの講演の実現でも多くの皆さんのご支援や皆さんと小林さんの信頼関係がありました。私が何者か知っていたたくにも良い機会ですので、長くなりますが、数例ご案内します。

私の初めての海外は、社会人になって入社3年目のインドのニューデリーでした。私は電話網構築のための駐在員事務所の設立の許可をいただくために、当時のボンベイに飛び、日本の研修で親しくなった通信省の局長の口添えと手紙を携えて日本銀行に相当するインド準備銀行(Reserve Bank of India)を訪問しました。もちろんRBIの皆さんとは初対面です。面談した担当者が親切で何もわからないだろうからと申請書を書いてくれて、必要な添付資料もご指導いただきました。大変にありがたいことでした。その後、フランスのミッ

テラン大統領とインドのガンジー大統領のトップ外交で両国は戦闘機ミニラジックと引き換えに電子交換機の現地製造と通信網建設の約束をとりつけたのですが、局長たちと先輩たちは交換機を電話網につなぎ、フランスは失敗しました。結果、印仏の約束は停止となりました。こうした地味で真面目な努力の目撃がその後の私の社会人生活の価値観に大きく影響しています。その後、私は海外のPC市場と産業エコシステムの開発に従事します。この時も私たちは初めての人たちに飛び込みで会って、事業を立ち上げ、市場と業界を育てました。例えばPCや携帯には最初からソフトウェアが入っています。誰もがこれを当たり前だと言いますが、これは私たち業界が同時に思いついたモデルで、このモデルは独占禁止法の抱き合わせ販売という違法な販売になる可能性があります。詳細は語りませんが、これを押し切って業界全体で苦勞して動いた経緯があるのです。例えば米国IBMは当時、ソフトウェアとPCは別販売でした。その後海外PC市場からの撤退が決まり、私は転職します。

転職後まもなく、インドネシアの会計検査院や行政監査の職員が2か月ほど日本の政府監査や政府会計制度の調査で来日したとき、私は、会計検査院、行政監察局、東京証券所、東京都と大阪の監査委員、旧大蔵省、旧運輸省、エネルギー庁、日本輸出入銀行勤務先の引退された元会長など、すべて電話で面談の申し入れをし、訪問し、プログラムを企画し、研修を運用しました。メールのない時代です。皆さん初対面でした。国家開発計画省(通称バペンサ:BAPPENAS)の大臣で、大統領となったハビビ氏の肝いりの高等人材開発事業のひとつであったことが幸いし、皆さんとても協力的でした。

21世紀に入つてインターネットでの社会が立ち上がつていく中、勤務先の同僚と、情報通信業界に関する記事の東洋経済やリックテレコムへのネット投稿、日経BPの雑誌とネットへの投稿、日経新聞や中央経済社からのコンテンツビジネスに関する出版、前線でも活躍する情報通信業界のキーパーソンの皆様の勤務先向けの

講演、情報通信学会などの活動、情報通信の業界団体での活動なども行いました。初対面の著名人や大手企業の経営者の皆さんとつながりましたのは、大学の同窓生、私のお客様や取引先、霞が関の皆さま、勤務先の同僚のご支援のおかげです。日経新聞からのコンテンツビジネスの著作は高額でしたが1万冊頒布されました。

◇ボランティアの音楽活動支援

昨年2023年、タイの貧困地域(スラム街)はタイでは禁止用語の子供たちのオーケストラが北海道、熊本、東京そして在東京タイ大使館で演奏しました。テレビ報道や新聞報道もあったので、ご覧になった皆さんもいらつしやるかもしれません。このボランティア事業では日本在住のタイマイクロエレクトロニクスセンター(TMEC)の研究機関の初代所長に、音楽での国際交流のために設立したNPOの3名の代表理事のひとりになっていただき、多くの支援をいただきました。初代所長はタイ大使とは日本に留学していた学生時代からの親友同士です。元所長は過去一度だけお目にかかっただけでしたが、TMECの設立と研究開発に係わった初代所長と戦友で75歳のNITの厚木研究所の元研究者と僕は親しかったのです。お二人ともバンコクで知り合いました。バンコクでは日本の国立研究所、タイのチテラロンコン大学工学部とTMECの共同研究のマッチングを行い、帰国後も大学の先輩の依頼で日本のベンチャーの海外進出でTMECのマッチングを支援しました。したがってこのお二人と私の関係は深く、このお二人の力なしには、これだけの規模のコンサートは実現できませんでした。

またこのNPOがタイの大学の学部音楽教育学科を作りたいという目的のために、各方面にアプローチしましたが、こちらも初対面の皆さんが多いです。こちらも泰日工業大学の副学長のご支援をいただき、皆さんのご支援で、モンキット王大学での設立検討が始まっています。モンキット王は、「王様と私」に登場する王で、その最後のシーンで話している子供がチテラ

ンコン大学の名前になっている王です。モンキット王大学の設立の経緯は、電電公社の初代総裁で日本電気元社長の梶井剛氏や、総裁の部下だった東海大学の初代総長で創業者松前重義が深く関わっています。ここには戦後日本復興の物語もあります。

このNPOは当初、我孫子も本部候補で、後に支部を置きましたが、このとき我孫子市に飛び込みで相談し、我孫子市民ステーションの高橋由紀様をご紹介いただき、初対面でしたがご相談しておりました。ひとつ団体を紹介いただき、演奏会にも参りましたが、この団体との関係は実現できませんでした。いよいよ子供たちの来日公演とタイ大使館での日本の演奏家による無料のチャリティーコンサートが急遽決定したとき、高橋さんに相談して、スタッフのプロのチューバ奏者でもある小嶋緩秀さんをご紹介いただき、2023年9月にタイ大使館で小嶋さんがリーダーの金管四重奏団の演奏を聞かせていただきました。会場は満席で、タイ大使とお話も対応いただきました。

子供たちの帰国後、高橋さんには改めて我孫子での文化交流の活動につき、その段取りにつきご相談をしておりました。小嶋さんにはタイでの貧困層の青少年オーケストラの子供たちが自立していくための音楽関係の技術者やビジネスの職業訓練につき、日本の音楽家を支援する技術者とビジネスの専門学校をご紹介いただきました。またタイでの子供向けの音楽活動につき、我孫子や小嶋さんのお仲間の音楽家の東南アジアでの子供たち向けの演奏機会を作るべく相談させていただいております。

◇兼子への関心

私は音楽が好きで、高校では吹奏楽でユーフォニアムを、大学から30歳まではオーケストラでホルンを吹いておりました。仕事が忙しくホルンはやめてしまいました。私は特にカオペラや歌曲が好きでした。また日本の文部省唱歌や童謡も大好きで、歌謡曲に疎い私のカラオケの持ち歌でした。ゆえに日本歌曲で知られている柳兼子のごともお名前だけは存じておりまし

た。

柳兼子への真剣な関心は、2004年(平成16年)に取手市から我孫子市に移転してから始まります。同社の社員だった我孫子市民のひとりから元同僚が白樺文学館を建設したので訪問してみたらと紹介を受け、さつそく訪問しました。その兼子の部屋で兼子の話題と歌を聴いて、マリアカラスというオペラ歌手に似た歌声と音楽の感性にいつべんに魅惑されました。それから白樺文学館や文化人のゆかりの場所を訪ね、個人的に柳兼子のごことを調べておりました。2年後2006年には兼子がバーナードリーチの助言で料理した白樺派カレーも再現した人たちがいると聞き、随分レストランを探しまわって、試食したことも覚えていいます。

その後しばらく勤務先を退職したことから自営業に忙しく、兼子への関心が薄れておりましたが、バンコクに駐在する直前の2013年に、板前の祖父の大牟田市の店にバーナードリーチがよく食事に来ていたことを親族から聞きました。このとき白樺カレーのことを話題にしたところ、祖父や母も味入りカレーをよく私たちに食べさせていたことを一同思い出し、兼子のカレーとの関係があるか調べました。時期的に見て恐らく兼子のカレーとは無関係と思われませんが、これをきっかけに再び兼子について調べるようになりました。白樺派のオペラ化への動きを知ったのもこの頃です。残念ながらバンコクに駐在したため聴くことはできませんでした。このオペラで兼子をどう描いたか知りたいです。

私の兼子の調査には限界があり、我孫子市民や市外の皆さまの中には、きつと兼子に詳しい人がいると、お話を聞きたいと強く願っております。

◇音楽家との交流と小林さんとの接点

バンコクに駐在しているときハーブのレッスンを受け始めました。帰国後もハーブのレッスンを受け、毎週のようにはハーブ奏者のみなさんの演奏会に出かけ、ハーブはもろろん様々な楽器の演奏家とも出会って、私のことを覚えてくれて話しかけてくださる演奏家も増え

ました。ここでは小林緑さんにつながるきつかけとなった演奏者数名をご紹介します。

2019年1月に、話が面白くて教養豊かなハーブ奏者、中村愛(めぐみ)さんのライブでアルパを弾き語るメゾソプラノの池山由香さんの演奏を拝聴しました。由香さんの声にひと耳惚れしてすっかりファンになりました。また愛さんからは2022年11月にお使いになっていたハーブを売っていただき、我が家にわざわざハーブを納品に來られました。レッスンを受けたことも二度あります。

2020年だったと思いますが、由香さんと同じアルパ奏者の藤枝貴子さんの演奏をオンラインのライブ配信で聴く機会があり、貴子さんと親しくなりました。偶然にも貴子さんは由香さんと親しく、由香さんと貴子さん二人のライブ配信や、一時帰国時のおふたりの演奏会にも参加して、由香さんとお話しするようになりました。また由香さんの紹介で、由香さんの演奏付きの小林さんの講演を拝聴する機会が数回あつて、小林さんのお名前は数年前から存じ上げておりました。

2022年11月の本帰国後は、愛さん、由香さん、貴子さんのライブに何度も出かけるようになりました。皆さんとお話する機会も増えました。

昨年2023年3月、愛さんが小林さんの最新著作『ポリーヌに魅せられて ジョルジュ・サンド ツルゲーネフ ショパン サン＝サーンス リストたちが讚えた才能』(2023年、梨の木舎)をラジオで紹介しました。その話題はとても興味深く、早い機会にこの著作を購読しようと思っておりました。その矢先のことです。ここからは前回の投稿でもご案内しましたが、昨年2023年4月、武蔵小金井駅前宮地楽器ホールで開催された国際女性デー記念演奏会にて、小林緑さんの講演を由香さんの歌と演奏とともに拝聴しました。このとき小林さんからも『ポリーヌに魅せられて』の紹介がありました。念願だった小林さんとの直接の出会いも実現し、この本も購読しました。

ハーブはサククスと並んでフランスの近代のクラシック

音楽で使われることが多く、ドイツ音楽とイタリアオペラ中心だった私の音楽指向は19世紀から20世紀のフランス音楽に傾倒するようになりました。ですからフランス音楽中心のこの本の内容は魅力的でした。この本の中で、小林さんが柳兼子にも触れていました。ポリーヌも兼子もアルト歌手であり、シューベルトの魔王に関する二人の話題など興味深い話題でした。小林さんの他の兼子論を探して読みました。こうして兼子への三度目の興味が再燃しました。

◇小林さんの講演の実現の経緯

小林さんのお名前が緑さんであることが、兼子の家の跡地と白樺文学館が縁にあることから縁を感じ、我孫子市に小林さんをお呼びし、市民の皆さんと兼子の話題を共有したいと強く願うようになりました。そこで小林さんに前の段落の◇兼子への関心と◇音楽家との交流と小林さんとの接点について触れて、白樺派カレールを同梱し、「受け入れ先はこれから探しますが、ご講演いただけますか」と講演の可能性を打診したところお手紙をいただき、快諾いただきました。その後メールでのやり取りが続きました。

次に小林さんの講演を白樺文学館でできるか、できるためにはどうしたらよいか注意点を聴こうと白樺文学館を訪問して相談したところ、我孫子市の教育委員会を紹介されました。そこで教育委員会に電話で相談したところ、私の理解が正しければ「白樺文学館での私的な講演での利用は困難である。講演を開催する場合は白樺文学館が開催する。だがすでに今年度の事業の予算枠は昨年の夏に決定しており今年度の実現は難しい」というお返事をお電話でいただきました。ただ「何か白樺文学館でイベントがあれば、その中での講演はありうるかもしれないが期待はしないで欲しい」ということでした。その助言「なるほど、私営の文学館ではない公営なのでもっともだ」と思い、小林さんの講演に向けての段取りを我孫子市民プラザの高橋さんに相談したところ、「今後の市民活動に慣れるためにまずは活動に熱心なグループの活動を見学して、相談してみても」と2つのグループを紹介した

いただきました。高橋さんは小林さんと面識はありませんが、よくご存知でした。ですから私のお話はすぐにわかっていただけだと思います。

その後我孫子の文化を守る会「美崎さんにコピーボードで初めて出会い、学芸員の稲村隆さんから白樺文学館につき「放談くらぶ」でお話を聞く機会をいただき、傾聴しました。稲村隆さんとの出会いも初めてでした。稲村隆さんのお話を拝聴して、小林さんの兼子の話を我孫子市民の会員さんと一緒に聞きたいという願いだけでは根拠が弱いと反省し、長期的には、兼子の人生や音楽だけでなく、我孫子市での兼子の足跡を軸に、我孫子の皆さんの知見を整理しつつ、兼子に惹かれる市外の皆さんとも交流も果たして、市内と市外の皆さまの知見も集約しつつ、共同で兼子の記録をアーカイブとして残したいと考えを改めました。また活動資金も自力での調達が必要だとわかり、学会や市外の識者の知恵や「我孫子の文化を守る会」での兼子の調査活動資金を獲得するためにも、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金/科学研究費補助金)や国や県の業務委託費や助成金、クラウドファンディングなども活用しようと考えてに至りました。また兼子を巡る国際交流やジェンダーという切り口であれば、これに対応する国の機関の財布もございいます。国際交流であれば私も嗅覚がありますし、ジェンダーであれば小林さんを含めジェンダーに関心のある協力者の支援も可能かと思っております。クラウドファンディングは私だけでなく由香さんも経験があったと思います。

その後、美崎さんがご支援をいただけることとなり、我孫子の文化を守る会の「放談くらぶ」での小林さんのお放談が決まりました。その後の経緯は会員の皆さんのご案内の通りです。ありがたうございました。今後は小林さんと「我孫子の文化を守る会」の皆さんが仲良くなるための食事会などの開催を提案させていただき、12月上旬の開催で「了解いただけました。ありがとうございます」と言いました。私は兼子の知見はないに等しいですが、会員の皆さんのご発言をテーブル起こしする作

業はお手伝いできます。

◇池山由香さんの演奏

「放談くらぶ」の小林さんの放談では、当初は小林さんとも縁があるアルパ奏者の由香さんの演奏もセットで考えておりましたが、時間の制約や予算的な課題などに鑑みて、別の機会に由香さんの演奏会を開催しようと思っておりました。ところが幸いなことに全くの偶然ですが、由香さんは10月20日に我孫子で先にご紹介した貴子さんと、もうひとり、パークションのすずきあゆみさんと二人で演奏会を開催します。このイベントは由香さんのファンの主催と、貴子さんから聞いております。こうした幸運は、こうした企画を進めるとよく起きますよね。皆様の「来場をお待ちしております。演奏終了後に由香さんを始めとして演奏者3人を皆さんにもご紹介できると思います。」

日時：10月20日14:00開演

会場：アロハ 我孫子市寿2-27-13-1

(我孫子駅より東我孫子駅車庫行に乗車、市役所前下車、バス進行方向に坂を登り120メートル左側)

演奏：カプマリ アルパコンサート(アルパ池山由香、アルパ藤枝貴子、パークションすずきあゆみ)

申込先：池山由香 nfo@yukaikayama.jp.org
チャージ：5000円(軽食ドリンク付き)

◇おわりに

小林さんと交流ある由香さんが私に面識があつて、そのことで小林さんも「信頼いたされたのだと思いません。私が間違つた電話番号を小林さんにお知らせしたときも、由香さんは私の正しい電話番号を小林さんにお伝えしたそうです。先日7月7日の愛さんのコンサートでも由香さんにお目にかかることができて、小林さんのことで御礼を申し上げました。

小林さんのパートナーは、音楽や古楽器演奏の世界では著名人です。またハーブという楽器の歴史に詳しく、ハーブ業界と関係が深い業界人です。私もアマチュアですがハーピストで、ハーブ演奏者と交流が多く、

このあたりでも「信頼いただけたのかもしれない。」

今回はお盆ということもあつて、ハーブ奏者や国立音楽大学OGOB、東京藝術大学OGOBの皆さんのご来場は実現しませんでした。音大のOGOBの皆さん、もちろん小林さんのことはご存知です。「我孫子の文化を守る会」の皆さんにもOGOBの皆さんをご紹介したかったところです。おひとりは小林さんのパートナーをよくご存知のハーブ奏者です。国立音大OGOBのひとりは、私の大学の卒業研究(光学活性による牛乳タンパク質の三次構造の解析)の指導教官の末のお嬢さんです。このお嬢さんのことは小林さんにもお伝えしました。

由香さんと貴子さんは、我孫子市のコンサートで「ご紹介できると思います。もうおひとりは中村愛さん。由香さんの20年以上の親友で、由香さんは愛さんからのご紹介でした。また「ポリーヌに魅せられて」の最初の紹介もラジオで愛さんでした。愛さんは文学、絵画や彫刻に詳しく、絵も描かれます。特に近代のハーブ曲ともかかわりの深い印象派から象徴派の文学や絵画に明るく、美術館との連携でのライブも開催されています。ゆえに愛さんと由香さんの両名が、我孫子や白樺文学館とゆかりのある彫刻や絵画、文学を素材に我孫子で「ラボレーション」ができるかどうか検討したいです。演奏会の場所は会館の事情や制約もあるので白樺会館である必要性はないです。由香さんは歌手ですので、兼子に関わる歌も弾き語っていただけだと思います。愛さんは動物や鳥がお好きなので、鳥類博物館や山階鳥類研究所にも「案内し、可能であればそこでの演奏、手賀沼の鳥たちにも会わせたい」と思っております。

むすびに「我孫子の文化を守る会」の「放談くらぶ」で小林緑さんの放談を実現していただきましたことと関係者の皆さまのご支援に感謝申し上げます。

◇追伸

我孫子の平将門の歴史について、今まで注目されて来なかったと思われる柴崎神社に注目してみたいとも願っています。宮司さんからはお話しすることの「了

解をいただいております。大鏡に承平・天慶の乱の記載がありますが、大鏡は我孫子について記述があつた不確かな記憶があります。詳しい会員がいらっしゃると伺っています。ぜひこのふたりの「放談くらぶ」も実現したいと思っております。宜しく願います。柳夫妻は不明ですが、志賀直哉の小説「十一月三日午後の事」に東源寺の文字が見えるので隣接の柴崎神社も志賀は訪ねているかもしれません。

放談くらぶ『兼子』を拝聴して

突然現れた池末氏と放談くらぶについて2度お会いした。池末氏の話は多岐にわたり時間はアツという間に過ぎた。放談くらぶの話は殆どなかった。通常の放談くらぶは当日の内容を要約したものを会報にも掲載し事前に講演の概要が分かるようになっていた。しかし今回は演題こそ「兼子」となっているが、池末氏に言わせると「小林先生は柳兼子の(研究の)専門家ではありません」と言う。

どんな放談くらぶになるか、興味半分、心配半分というのが講演が始まるまでの正直な気持ちだった。

私としては初めてお会いする小林先生であり、簡単な挨拶を済ませた。その後、先生の講演が始まると私の心配は杞憂に終わった。お偉い先生にも拘わらず物腰の柔らかい、また仕事としての先生の経験と沢山の講演の経験からか、たちまち参加者を小林先生の世界に引き込んでしまった。

話は「消される女性作曲家」というテーマから始まった。「演奏はもちろんのこと、音楽創造力に男女の優劣はないにも関わらず、日本で演奏されるクラシック音楽は一握りの男性作曲家の曲ばかり」という内容である。私自身男性の所為からか今まで思いもつかず、頭をガツンとやられた思いだった。会社での男性優位ばかりか、一般社会での男性優位に対し漸くジェンダーの考え方が浸透し始めた時期だが、音楽の世界もそうだったのだ。クラシック音楽で私が知ってる女性作曲家の曲は『乙女の祈り』だけである(その女性の名前は何回聞いても覚えられない)。

小林先生が柳兼子に興味を持ったのは、男女差別が厳然と存在していた時代に、兼子が堂々と自分の意見を述べていることである。「第九」のアルト歌ついてもちつとも面白くない」「山田(耕作)の歌は女学生唱歌よなどクラシック界では絶対視されていた「大物」に向けて歯に布着せぬ批判をした。」というのだ。

小林先生の著作にも『女性作曲家列伝』(1999年、平凡社選書)、『視覚表象と音楽』(シンデラー史叢書第4巻、2010年、明石書店、池田忍と共編著)があり女性音楽家に並々ならぬ関心と興味を持たれているのが分かる。その中でも特に兼子に特別の関心を持たれているのだろう。

小林先生は仰る。「日本民藝館」の話が出ると、必ず柳宗悦の功績と言われるが、その裏に妻兼子の献身的な援助があったことを忘れてはならない」と。

少なくとも我孫子の文化を守る会では「日本民藝館」の話が出ると、必ず兼子の援助を必要以上に声高に言うことになっていることをお伝えしたい。

家庭内での宗悦に対する対等以上の関係(息子たちの発言から)や宗悦の大反対にも拘わらずドイツ留学を履行したのは、自分(兼子)が家の経済を支えているという自負があったからだろう。(T.M)

あびこだより1113号

演題

「志賀直哉―如何に我孫子を描いたか」

―街歩きガイドの点から面への質的転換を―

ふるさと我孫子ガイドの会 会長 中込 力三

「白樺派のガイドをしてほしいのですが」とのガイド依頼があると従来は、我孫子駅前にある飯泉喜雄氏の記念碑から始まり、臨湖閣に隣の三樹荘、バーナードリーチ碑そして白樺館、志賀直哉邸へと案内を行いガイドとされていた。

建物や碑を中心とするガイドで、依頼者の期待を果たせたと思っていた。

然しながら、例えば、志賀直哉の小説を読むと我孫子市内の道筋、寺社、商店、それに仲間達が描かれている。ガイドを要望している人達の多くは志賀小説を読んで、その延長線上に我孫子を訪れている。

こんな場所に志賀直哉や柳宗悦は住んで小説等を描き、雑誌「白樺」に投稿していたんだと関心を深めて頂いたとは思っているが、志賀小説との接点弱い事は否めない。であれば、志賀小説を主体として描かれている個がどの場所に存在し、どの様に描かれているのかを探つたらどうか。この考えに基づいて作成したのが「志賀直哉文学仲間達で我孫子を彩る」となる。

令和3年から令和4年に、この考えに基づいてガイド物や碑を説明するのでは無く、セミナーを行つてから街歩きをする事にした。

志賀直哉の基本知識を共有化してから(セミナー形式)街歩きを行った。

「セミナー&街歩き」の狙いは手ごたえを感じたけれど、ここで大きな課題を感じる事になる。

それが「白樺派のまちの見える化」へと進展する事に。大きな課題は、志賀作品に出てくる道筋、寺社、商店それに仲間達等の案内板が余りにも少なく臨場感ある説明が出来なかつたことである。

空地となつているか、建物は有るが当時の建物ではないか、存在するものがないか等であり、ガイドでの説明そのものが却つて白けてしまう雰囲気。

夫々の場所に説明板があれば臨場感はずすのになあ・・・と思つた次第。

「見える化」の発案者は、吉澤淳一さん(我孫子の景観を守る会の前会長)ですが、現在、三団体(我孫子の文化を守る会、我孫子の景観を守る会、ふるさと我孫子ガイドの会)が中心となつて我孫子市役所に具体化に向けて折衝を行っている。

「志賀小説を片手に街歩きを」が実現すれば我孫子の魅力は大幅にアップ!

以上

楚人冠と我孫子ゴルフ倶楽部

美崎 大洋

大正9年の戦後恐慌、大正13年の関東大震災など、第1次世界大戦後の日本は慢性的な不況に陥っていた。昭和2年8月、第1次若槻礼次郎内閣の片岡直温大蔵大臣の議会で「失言をきっかけにして、銀行の取付けが相次ぎ、金融恐慌が始まった。若槻内閣は、経営危機に陥つた台湾銀行に対して日本銀行から非常貸出しをすることによって同行を救済する緊急勅令案を上奏し、枢密院に諮詢の手続きをとつたが枢密院は、この緊急勅令案を否決。若槻内閣は総辞職した。

そんな昭和2年、染谷正治は、34歳で我孫子町長になつた。我孫子町も当時全国的な金融恐慌の嵐の中で疲弊していた。我孫子町は比較的経済的に安定した駅周辺住民と農業従事者との間には貧富の差が大きかつた。そこで染谷は昭和4年町内の経済格差の解消と昭和金融恐慌の影響を受けて疲弊していた我孫子町の発展を期した山林地帯の一部を住宅地として開発するなどの我孫子建設構想を考え、別荘を持ち度々在留していた東京朝日新聞の杉村楚人冠にこの構想を打ち明けて相談した。杉村は、「ゴルフ場を造つたらどうか」と勧めたため、染谷はゴルフ場建設を決定し、土地買収や建設に自ら東奔西走した。楚人冠は当時は未だゴルフの経験はなく赴任したイギリスでの経験を述べたのだと思う。

最初の計画は、ゴルフ場用地の買収が予定通りいかず一時頓挫した。その折、染谷町長は窮状を打開するため、我孫子に別荘を持つてはいたが、それほど面識はなかつた嘉納治五郎氏に事情を訴え「名誉会長になつて貰いたい」と考え、小石川の本邸を訪ねて逐一力説したところ、治五郎は「町発展の為とあらば一臂の力は惜しまぬ・・・」と言つて引き受けた。嘉納治五郎氏や杉村楚人冠氏の奔走により、東京ゴルフ倶楽部の森村市左衛門のはからいで熱心な会員であり、もと浅野造

船所の重役であった加藤良氏をゴルフ場設立の責任者に推薦したのである。

加藤良は、我孫子の新ゴルフ場について、華族の社交場であったゴルフ倶楽部を庶民の為に平等で自由にして民主的且つ、エチケットマナーを重んじるゴルフ倶楽部を作ろうという信念を持って、アマチュアでありながら当時の日本ゴルフ界のスター選手であった赤星四郎(注)と弟の赤星六郎にコースの設計を依頼した。赤星は利根川と手賀沼に挟まれた立地条件を生かし、アメリカ合衆国東海岸の名門ゴルフコースでプレーした経験を活かし戦略性の高いコース設計を目指した。

(注)明治28年、東京鳥居坂で実業家・赤星弥之助の四男として生まれる。実業家の赤星鉄馬は実兄、同じくゴルフアワードでゴルフ場設計者の赤星六郎は実弟。弟の六郎とともに日本のプロおよびアマチュアゴルフの育成・指導に努めた。多くのゴルフ場の設計に携わり、広く知られるものとしては箱根カントリー倶楽部や御殿場ゴルフ倶楽部などがある。大正15年には日本アマチュアゴルフ選手権で優勝。晩年には日本女子プロゴルフ協会名誉会長に就任するなど、女子プロゴルフの育成にも尽力した。

そうした多くの人たちの努力が実り、1930年(昭和5年)2月着工、同年10月5日、9ホールにて仮オープンした後、18ホール造成が完了した1931年(昭和6年)10月18日に正式オープンとなった。

後年、染谷氏は我孫子ゴルフ倶楽部の会報に寄稿した「クラブ創立の思い出」の中で、「加藤氏は実に私のためには、救命主出現の想いがあつた」と述べているが、我孫子ゴルフ倶楽部が無事創立をみたのは、加藤良氏の犠牲的な努力のおかげであった。

我孫子ゴルフ倶楽部は、第二次世界大戦時は海軍經理学校の接収を受けて農地転用されていたが、終戦と同時に軍の接収が解除となり、かつ連合国軍総司令部(進駐軍)からも接収されることがなかったために1948年(昭和23年)にゴルフ場への原状回復が成つて再オープンとなった。この再オープンの時にアンシエート・メンバー制と法人会員制が導入された。

2013年(平成25年)、本コースは倶楽部創立100周年を見据えてアメリカ合衆国のコース設計家であるブライアン・シルバと造成家であるカイ・ゴールビーのふたりにコース大改造のデザインを依頼し、彼らの手により赤星六郎の設計思想を活かしつつ、10ヶ月に及ぶ大規模なコース改修を実施した。

「我孫子ゴルフ倶楽部のドレスコードエチケット」

当倶楽部における服装は、歴史と伝統を重んじ、倶楽部の品位を損なうことなく、周囲に違和感や不快感を与えないよう心がけております。詳細については下記をご覧ください。

倶楽部に相応しくない服装と判断された場合、ご注意の上、着替え等をお願いすることになります。ゴルフは気品溢れる紳士淑女のスポーツ。我孫子ゴルフ倶楽部を愛する全ての方が気持ちよくプレーできるように、ドレスコードとエチケットを守り、品位あるプレーの時間をお楽しみください。

筆者も昔、年に何回か名門我孫子倶楽部でプレーする機会があつたが、ある時こんなことがあつた。

その日は十何組かのコンペだったが、私早めに着いたため1階のロビーで寛いでいた。外をみると若い方がゴルフバッグを担いで玄関に向かつてきた。そこへ支配人が急ぎ足でその若い方に近づき何やら話をしていた。暫くすると二人は別れ若い方はゴルフバッグを担いだ状態でもと来た道を帰つていった。若い方は上着を着ておらず、私は、やはりドレスコードに抵触したのかと思ひ戻つて来た支配人に思い切つて聞いてみた。「上着を着用されていなかったからですか?」支配人は「ドレスコードとは関係ありません。隣の東我孫子カントリーと間違えて来てしまったようです。」との答え。

因みに一部では隣の河川敷の東我孫子カントリーを「我孫子ゴルフ倶楽部東コース」と呼んでいたり、閑話休題

ゴルフアワードとしての楚人冠

我孫子ゴルフ倶楽部の設立に深くかかわり貢献があつた楚人冠がゴルフを始めたのは昭和2年(1927)

頃と思われる。楚人冠は非常に熱心なゴルフアワードで技術向上のための研究にも余念がありません。昭和5年にゴルフ雑誌に次のような記事を寄稿している。「ゴルフを始め丁度二年と八カ月になる。忘れもせぬが、初めて取つたスコアが、9ホールで147という大べらぼうな数を示して以来、いくら勉強しても更に進境を見ず、一週に二回は必ずコースに出て、出れば必ずレッスンを取り、宅では毎日裏山で練習し、その外に書物を読み、雑誌を読み、人の教えを聞き、凡そ人間の出来る限りのあらゆる努力をしたが、どうしても上手になれない。とうとう六実で一番下手くそといえは必ず私が引合いに出すことになつてしまつた。上手で有名な人なら、世界中にいくらもあるが、下手でおれほど有名になつたものは恐らくあるまいと情けないことを考えては、わずかに自ら慰めた。」

熱心なあまり楚人冠は最初に通つた六実のゴルフ場のそばの小松林のまんなかに「晩花林(ばんかりん)」と名付けた小さなコテージを建てることまでしている。この名前は「Bunker Inn.」つまり一度入つたら出にくいという洒落だつたようだ。(昭和4年1月)

昭和5年10月には、我孫子ゴルフが開場した(仮オープン)。楚人冠にとつて我孫子ゴルフはまさしくカジナルなゴルフ場で、ある時は乗合自動車、あるいは自転車、そしてある時は徒歩でも来られるゴルフ場だつたのだ。

楚人冠のゴルフ熱は寒い冬でも雨の日でも冷めることがない。「降つてから十日もたつた雪だ。どうせゴルフはやれないだろうが、そのやれなさ加減がどんなものだろうか、それを見とどけたが雪見に六実まで出かける。(中略)クラブにたどり着けば、クラブの役員たちストーブを取り囲んで、旨そうに茶をすすつているところ。その中のお座けたのが一人私の顔を見る1414より早く「おまわりになりますか」とばかり。(昭和6年2月)楚人冠の気持を見透かしたかのようにからかつてい。

朝目覚めてまたま雨の日であつた時は、(ゴルフに行けないので)心をおちつけて又うとうととまどろみ、

「晩春から初夏にかけての曉ばかり、心の慰めらるゝものはない」としながら、庭の花を硝子越しに眺めて一日過した後、「ゴルフにゆけぬ日こそうれしけれ」と締めくくっているが、逆にゴルフに行けなかった無念さと負け惜しみの気持ちが滲み出ているように思える。(昭和7年5月)

それでも技術向上を目指す楚人冠にはもつと早くゴルフを始めたならばよかったのという気持ちがあった。実は大正3年、東京ゴルフ倶楽部が駒沢に出来た時に友人から勧められたことがあったようで、「何であの時(約20年前)に始めなかったか」と後悔している。

一日はゴルフを止めるも

ゴルフを始めてから8年経つた頃、一向に進歩せず、むしろ年とともに下手になっていくようになり心細くなつた楚人冠はゴルフをやめることにしたが、やめて三月ほど経つと身体がだんだん太り出して来た。知り合ひの医者に相談すると、運動不足だと言われ、歩き回ったり、自転車に乗ったりしたが面白くない。そこで捨て置いたドライバーを持ち出して空振りをしてみると、たまにいいフォームで振れるし、練習ボールなどを打つてみるといい音もするし当たる。「そこでやめてから三月目に又ゴルフを始めることにした。そうすると、よく又始めたとして喜んでくれる人が多い。人を喜ばせるだけでも善い事である。」と再びゴルフする喜びを素直に述べている。(昭和9年1月)

楚人冠は最初に通つた六実のゴルフリンクスの他、藤ヶ谷のゴルフ場、柏のゴルフ場、我孫子ゴルフと主に4か所のリンクスでゴルフを楽しんだ。昭和7年8月には我孫子ゴルフで20日間プレーするという自己新記録を作つた。また楚人冠にとつてゴルフは生活のなかでもっとも重要な位置を占めるようになり、コミュニケーションの場としての効用も認めていたようだ。すなわち朝日新聞の仲間・同僚や政治家、外務省の役人などと一緒にコースを回っている。一緒に回るパートナーについてこんなことを書いています。「凡そゴルフほど人の心が知られ易いものはない、作法を無視したりスコアを偽つた

りされると、相手の腹の底までが読める。そんな著しい事は言うまでもないが、ただ球の打ち方一つでも、これは穏やかな人か、がむしゃらな人か、一所に歩いてても、意地のきたない人か、こだわりのないさっぱりした人かは直ぐわかる。ミスを慰めてくれても、ロングパットをほめられても、それが口先だけの人が否かは一言で明かにされる」

成績もいつも悪かつた訳ではなく、昭和14年4月にこんな記述がある。「今日は小金井でゴルフの試合に珍しく優勝して、十何年ぶりで大きな賞杯(カップ)をせしめた」。しかし意気揚々と帰つた楚人冠は夫人から入院中の病人の容体が良くないと聞かされ、「折角のカップの包みを見せる勇気がなくなつた」と、この時は残念な結果になつてしまつた。

ゴルフでは次のような歌を詠んでいる。

オンとのみ思ひしに

キャデイのパタはくれず

マッシ・ニブリックよすが わびしき

(Maschie nioick 117番アイアン)

杉村楚人冠記念館 最新イベント

特別展示「ジャーナリスト楚人冠ってどんな人？」

明治、大正、昭和と、東京朝日新聞社にて国際的ジャーナリストとして活躍した杉村楚人冠。

彼の人生と、その中で成し遂げた仕事、そして出会つた人々を、書簡や書籍などの資料と共に分かりやすくご紹介いたします。

展示期間

令和6年7月2日(火曜日)から9月23日(月曜日・休日)まで

(参考資料)

『楚人冠全集』

『我孫子ゴルフ倶楽部年史』

五団体会議報告

分科会 「白樺派のまちのみえる化」

日時 8月2日(金) 13時半

場所 市長室

面談者 星野市長、渡辺副市長

議題

当方からの提案「葉島の「ちば文化資産」として我孫子市から選ばれたうちの一つの「白樺派と文人たちの郷」を「白樺派のまちのみえる化」として具現化し、市政55周年記念事業と位置づけたい。」

これに対し

星野市長から「教育委員会などとの打ち合わせをして、手ごたえが十分な返答があった。」

日時 8月27日(火) 14時

場所 市庁舎分館会議室

出席者 文化・スポーツ課2名 市民協働推進課2

当方6名

議題 「今後の具体的な進め方」

(追想) 三谷和夫氏の文章を読む

講演 「高野山村の歴史と文化」 (要旨)

三谷 和夫氏

「高野山」の地名はコウノトリが飛来したことから「鴻ノ山」と呼んだ、また開墾地を意味する「荒野」の嘉字化として名付けられたなどの説がある。この高野山地区には市内最古最大(69㍓)とされる水神山古墳(船戸台、4世紀後半、前方後円墳)が存在する。この古墳は当時の卑弥呼の影響か女首長のものと考えられている。しかし今年、前原地区で方墳(前原古墳)が発見され、出土した土器から4世紀前半のものだと推測される。それが事実なら市内最古の古墳となる。古墳のある高台は手賀沼を一望できる絶好の場所で景観も素晴

らしい。高野山は我孫子地区の文化のさきがけとなつた地域といえる。

高野山には香取神社があるが、この神社は天慶3年(940)藤原秀郷が創立したとの伝承がある。現在でもこの神社の氏子是对岸の岩井地区との通婚がない。岩井地区には秀郷の仇、将門を祀る将門神社があり、このような歴史的背景がその理由であろう。1684年の棟札も収められており高野山地区の鎮守が目的と思われる。

寛永8年(1631)渡辺勘右衛門家が建立したとされる一石五輪塔が最勝院墓地内にあり、これも五輪塔としては市内最古である。また万治2年(1659)の建立の庚申塔(阿弥陀種子)も市内最古の庚申塔で渡辺4家、新井3家、岡田2家の名前がみられる。

寛永年間(1661~73)には手賀沼沿いに高野山新田が開かれ、高野山村下に千勝神社が建立され、渡船(高野山渡し)も存在した。

現在香取神社内に百庚申があるが、これはもと成田街道の村入り口にあったもので天保・嘉永(1844~52)年間に造立されたものが移設されたものである。

以上の歴史から高野山地区について考察すると

1. 縄文時代・弥生

14 時代 住民はいなかった(遺跡がみつからない)。

2. 古墳時代(4~8C) 現住民の先祖が移り住んだらしい。前原、水神山古墳を守りついでいる。

3. 古代 香取神社(940年創立)の氏子、現住民の先



祖。1684年 18戸、1908年 28戸

4. 生活 畑作農業、幕府・旗本相給、村高、元禄42石余、天保98石余。1660年代 高野山村下(新田) 開発、村高、天保2石余、家数5

成田街道沿い、(1779年伊達重村通行など)

5. 石造物 市内で早くから建立 1631年 一石五輪塔、1659年 庚申塔(いずれも市内最古)

1844年~1852年 百庚申(市内唯一) 信仰と財力が裏付けにあった。

6. 旧家 渡辺、新井、岡田の3家(新井はのち荒井)

7. その他

①手賀沼対岸の岩井とは1000年来通婚なし。

②最勝院(村内1ヶ寺)、檀家は香取神社氏子と共通と思われる。新四国札所27番であり、一茶の「七番日記」にも記述がある。

③天正20年(1592)の検地帳に「勝鹿郡 高之山御検地帳」の記述があり地名、人名が記載されている。しかし現在との関連は不明である。

④愛宕大権現(1745荒井氏)碑のもつ意味は?

⑤「新井」姓が「荒井」姓へかわる時期について

1659年、1710年の時期は「新井」の文字。「荒井」は1704年、1721年、1734年、1745年、1755年の時期に見られる。1800年、1813年に一時「新井」が再び見られるが、荒井本家では1830~44年、「荒井」の文字、1833年、1856年のものも「荒井」となっている。

(平成21年10月 会報126号より)

榎本家住宅が国の登録文化財に

市内にある「榎本家住宅」が国の登録有形文化財(建築)に登録された。

令和6年7月19日(金)に国の文化審議会文化財分科会は文部科学大臣に対し、我孫子 市所在の「榎本家住宅」を答申した。今後、官報告示されると登録

有形文化財(建築)となる。我孫子市内にある国の登録文化財は「根本家住宅」に続き2例目となる。

●榎本家住宅とは

榎本家は我孫子市布佐にあり、敷地には、主屋、離れ、北土蔵、釜場、正門、稻荷社の建築物があり、これら6つが

今回登録有形文化財(建築)の対象となった。榎本家は17世紀に下野国都賀郡から移住したと伝えられ、利根川の水運業を生業にしていた。とりわけ明治後期・大正期には、布佐町長や衆議院議員な役割を担ってきた家柄である。

建物は利根川の歴史とも密接にかかわっており、我孫子市の歴史を伝える上でも大切な建築物である。

(我孫子市ホームページ)



第四十八回短歌の会(最終採択の一首)

七月二十三日実施

万物が緑の中でひともの
ピンクの螺旋凜と咲きたり

村上 智雅子

物はみな記憶を手繰るよすがなり
わが人生と共にしあれば

納見 美恵子

檜扇のいちにちばなのあでやかさ
日々大切にとわれに言ふごと

佐々木 侑

辻角にカサブランカの香り立つ
散歩の足を止める夕暮れ

芦崎 敬己

世話焼かれ「余計なお世話」と言いつつも
こころの中は感謝いっぱい

美崎 大洋

手をあげて此処だ此処だと吾を呼ぶ
亡夫は健やか夢の中にて

伊奈野 道子

若き日に挿絵に惹かれ求めし本
八十にして初めてひも解く

前原 安世

当会の行事予定

□「放談くらぶ」

日時 10月22日(火) 14時〜16時
会場 市民プラザ会議室1

講師 中込力三氏(ふるさと我孫子ガイドの会会長)
演題 「志賀直哉―如何に我孫子を描いたか」
―街歩きガイドの点から面への質的転換を―

参加費、会員無料、非会員200円
申し込みTEL(7185)0675 佐々木まで
(12ページ「あびこだより」参照ください)

□プロジェクト「短歌の会」
第四十九回短歌の会

日時 9月24日(火) 13時30分
場所 けやきプラザ10階小会議室

□プロジェクト「巨木 銘木をめぐる会」

日時 10月20日(日) 9時 我孫子駅改札口集合
観察先 東京大学構内(三四郎池周辺)
連絡先 佐々木 ○九〇―二五九四―〇四二五

川めぐりと木下の史跡散歩

我孫子市を始めとして近隣
七市で構成する「手賀沼流域フ
ォラム」が主催し、我孫子の文
化を守る会が企画・運営する
「川めぐりと木下(きおろし)の
史跡散歩」が開催されます。

参加ご希望の方は、是非、お
申込み下さい。

九月一六日の広報あびこでも掲載されます。

内容 手賀川下流を遊覧船で周遊し、手賀沼の現況
を知り、印西市木下の史跡を探索します。

費用 1人1,400円(弁当代) 船上で弁当を食べ
ます。

日時 一〇月一〇日(木)午前11時15分〜午後3時

30分 ※雨天時順延(一〇月十七日同時刻)

集合 印西中央公民館(木下駅より徒歩10分・当選
者に案内通知でお知らせします。)



募集 一〇名(中学生以上)

申込 ハガキに(1枚で2名まで)に参加者全員の氏
名・住所・年齢、電話番号を記入、
〒二七〇―一四三 我孫子市天王台3-32-6

我孫子の文化を守る会 佐藤やす子
(九月二四日必着、応募者多数の場合は抽選)

問合せ 佐藤 TEL 090-8081-9139 又は
芦崎 TEL 080-5029-6844

史跡文学散歩のお知らせ

日時 11月23日(土)

我孫子駅南口バス停・9時集合・雨天中止

講師 越岡禮子

題名 我孫子の白山・緑地区を歩く―園地文子、
寺山修司、岡田嘉子、深田久弥のゆかりを
求めて―

参加費500円(会員無料)

申し込み 村上まで 090-5333-1285
(なるべしショートメールでお願いします)

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る》
(連載第10回は次号に掲載します。)

編集後記 「地球は太陽の周りを廻っている。月の満ち欠
けは太陽の光を反射していること。起る」。これらは小
さい時に教えられる科学の常識である。しかし若し小さ
い時にこれらの事を教えられていなかったら、少なくとも
私は「太陽が東の空から昇って西に沈む」「月は自分自身
で光を放っている」と思っていると思う。▲科学技術の分
野では永い歴史の中でさまざまな事実が解明され、そ
れが蓄積されさらに後世に継承され、人工知能(AI)
I)を始めとする多くの新技術に結集した。これか
らも多くの新発見があるだろう。▲一方、人間の限
られた寿命の中では人間の能力の顕著な進歩は難
しい。人間同士の能力の継承が出来ないからである
▲限られた寿命の中では「何千年経っても人間の本
質は変わらない」ということか。「論語」の中の多くの表現
が現代でも役立つているのがその証拠である。また「人を
愛する喜びと悩みなど人間の感情は、千年前も今も変
わらない」とも事実である。男女の感情の機微を描いた
『源氏物語』は世界最古の古典と評価されている。(美崎)

